

三つの大量殺戮をめぐる不都合な文書

— スペンサーの『管見』とミルトンの『見解』

水 野 眞 理

はじめに

詩人ジョン・ミルトン (John Milton) が宗教思想家および政治思想家でもあることを疑う人はあるまい。しかし、こと日本においては政治パンフレットの多くはまだ研究の手が及ぶのを待っている状態である。本稿は、1649年5月、ミルトンが共和国政府の外国語秘書官に任命されて書いた『アイルランドの叛徒と交された和平条項、オーモンドよりジョーンズ大佐への書簡、およびベルファストの長老会の陳述についての見解』(*Observations on the Articles of Peace with the Irish Rebels, on the Letter of Ormond to Col. Jones, and the Representation of the Presbytery at Belfast* 以後『見解』と略す)を取り上げ、アイルランドに対するミルトンのまなざしを検討しようとする試みである。『見解』はミルトンが公人の立場で書いたものであり、個人として書いたパンフレットと同列に論じることはいできない。しかし、本稿では、公人としてのテキストに裂け目が

本稿は、2016年12月3日、龍谷大学で開かれた日本ミルトン協会第7回研究大会におけるシンポジウム *Observations on Observations — ミルトンとアイルランド —* での報告に加筆訂正を行ったものである。

生じ、そこから私としてのミルトンが不吉な形で顔をのぞかせることを明らかにしたい。

本稿でとる方法は、ミルトンの半世紀前にアイルランドに住み、イングランドによるアイルランド支配についての提案をおこなったエドマンド・スペンサーの『アイルランドの状況管見』（*A View of the State of Ireland* 以後『管見』と略す）を『見解』のサブテキストとして読むことである。ミルトンが『管見』を読んでいたことは明らかであり、『見解』の執筆においてそれをどのように咀嚼し、あるいはそこから影響を受けているのか、を考える視点は既に、一貫してポストコロニアルの立場から初期近代のアイルランド状況を論じてきたメイリー（Willy Maley）によって用いられているが、本稿ではメイリーも参照しつつ、彼に触れられていない「massacre（大量殺戮）」、というテーマを扱う。

ヨーロッパ各国が宗教改革、海外進出、絶対王政の流れに自らを投げ込んだ初期近代にあって、残虐行為（atrocity）は——少なくとも現代人の目から見て残虐と思われる行為は——日常茶飯事であった。David Edwards 編の論集 *Age of Atrocity*（『残虐行為の時代』2007）は初期近代、特に16世紀中頃から17世紀末のウィリアマイト戦争までをアイルランドにおける残虐行為の時代と定義し、その原因、認識、意義、影響など複数の角度から光を当てている。スペンサーもミルトンもこの時期に含まれ、アイルランドにおける、アイルランド人、イングランド人双方の残虐行為を直接・間接に体験した。

残虐行為が大規模に行われたとき、それは大量殺戮（massacre）として記憶され、記録に残される。ここではアイルランド人が初期近代の大虐殺として必ず挙げる大きな事件とそれに対する言説を取り上げる。第一に、1580年アイルランド南西部ディングル（Dingle）半島先端のスメリック（Smerwick）におけるイングランド軍による大量殺戮。次に1641年、北部のアルスターを中心とするカトリックによるプロテスタント・イングランド人入植者襲撃事件。最後に、20世紀に至るまでアイルランド人の心に傷と怨嗟となって残ったと

される 1649 年のクロムウェル率いるプロテスタント議会軍による征服の過程での大量殺人。『管見』と『見解』はこれらに関し、スペンサーとミルトンが残したテキストなのである。

I スペンサー『管見』における massacre

16 世紀後半のエリザベス朝アイルランドは、カトリックのゲール系アイルランド人と中世にイングランドから渡って定着したオールド・イングリッシュに対し、プロテスタント・イングランド政府から派遣された軍や植民者が次第に力を増し、三者がせめぎあう場であった。

1580 年、オールド・イングリッシュの大貴族デズモンド伯フィッツジェラルド家の第二次叛乱に対し、ローマ教皇がイタリア人とスペイン人からなる 600 名の援軍を送る。彼らはアイルランド南西部のディングル半島先端にあるスメリック (Smerwick) の Dun an Oir (黄金の砦) に立てこもるが、イングランド軍による海上からの砲撃に会い、またフィッツジェラルドの軍とも分断されて、投降を余儀なくされた。このときにイングランド軍の指揮をとっていたのが、スペンサーが私設秘書を務めたアイルランド総督、アーサー・グレイ (Arthur Grey, 14th Baron Grey de Wilton, 1536-93) であった。『英国国家文書要覧アイルランド編』(*Calendar of State Papers Relating to Ireland*)に残されているエリザベス女王の秘書長官ウォルシンガム (Francis Walsingham, 1532-90) への報告の要約によれば、アイルランド人に加えて多数のイタリア人、スペイン人、バスク人が殺されている。

1580 年 11 月 [11 日] 27. [空白] よりウォルシンガムへ スメリック攻囲の詳細：デズモンド伯およびジョン・デズモンドは必要とあれば砦の救援のために 4000 の兵を率いて山上来到ると約束していたが、姿を現さなかった。イモキリーの執事に捕らえられていたサー・ジェイムズ・フィッツジェラルドの解放。11 月 9 日砦は明け渡された。アイルランド人の男女全員は首吊り、これに加え 400 名以上のイタ

リア人、スペイン人、バスク人、その他が剣にかけられた。サンダース師に従ったイングランド人ほか2名の処刑、その手足を折って拷問を加えた。(CSP Ireland 267)

この要約には現れていないが、グレイは、投降した勢力に生命の保障を与えながら、それに違約して殺害した、とされており、そのことがこの事件を大量虐殺のケースにしている。投降した敵の生命は、当時慣習によって保証されていたため、グレイの作戦は不適切とされた¹。そしてそれを根拠の一つとして事件の2年後の1582年、グレイは総督職を解任、イングランドへ召還されている。グレイの死後、1596年にスペンサーはかつての雇い主を擁護する文章を対話体の植民地経営論『アイルランドの状況管見』の中で展開する。対話は一般の英国人を代表するユードクサスと、スペンサーの分身ともいえるアイリニアスとの間で行われ、前者が質問し、後者が答える、という形で進む。

ユードクサス まったく僕もこちらの巷でグレイ卿は「流血を好む冷血漢」だと聞いているが、…それは卿に対して不当だったと思うよ。卿は常に実に公正で、誠実で、信仰心厚く、まさに高貴な方だと知られてきたし、噂されるような冷厳さや不公正からは程遠い方だからね。ただ、スメリックの砦におけるスペイン人への厳しい処刑については、……もしそれがあつた人の言うように真実だとすれば、それは卿の名誉を大いに減ずることになる。というのは、卿はスペイン人たちに命の保証をした、と言われるし、それ以外の人々も、少なくとも卿は命の望みを持たせた、としているから。

1 次の引用中にある「諸国民の法」(Law of nations) がこれにあたる。国際法と訳されることもあるが、複雑化した近代の国際法(International Law)の一部として、戦線布告なしの攻撃の禁止、休戦、和平、国境の遵守、難破船とその乗客／乗務員の保護、海賊行為の非難、戦争捕虜への尊厳ある扱い、在外公館、公使の保護、犯罪人引き渡し、などが主たる概念である。のちにオランダの政治学者グロティウス(Hugo Grotius, 1583-1645)が*De jure belli ac pacis libri tres* (『戦争と平和の法に関する三巻』1625)で文章化し、近代的な外交を支える原則となっていく。

アイリニアス 僕自身誰よりも卿の身に近い所にいたからこれは請け合ってもいいが²、卿は命を保証するとか、希望を持たせるとかされたことは全くなかった。敵の密使でイタリア人……が、猶予を求めて総督と交渉のために送られてきたが、グレイ卿は言下にこれを拒否された。その後に敵の隊長……が、兵士らしく武器を携えたままで、それが叶わないなら、戦争の慣行と諸国民の法に基づき少なくとも命だけは携えて退却することを許されるよう、懇願に来たときも、それは強く拒否された。……汝らはいかなる法的な意味での敵でもないからであり、仮にそうであるというなら、ローマ教皇、スペイン王、その他誰のものにもせよ、いかなる委任を受けて他国の君主の領土へ戦争をしにやってきたのか、示されよ、と求められた。これに対し彼らは、自分たちはそのようなものは持たない、ただ外国で一旗揚げようとやってきた冒険者にすぎず、自分たちを喜んで迎え入れようというアイルランド人に立ち混じって参戦しに来たのだと答えた。これに対し、卿からは、デズモンド伯、およびジョン・デズモンドその他のアイルランド人自身が、そもそも法的な意味での敵ですらなく、単なる叛乱者、反逆者にすぎないこと、従って、彼らの救援にやってきた者たちも、自らの国王からの許可状や委任状も持たずに来襲した以上、ならず者、反逆者にすぎない……と申し渡された。……結局、あのように彼らを即刻片づけるしか道はなかったのだ (Spenser 104-05 拙訳)。

このくだりでスペンサーは、グレイ卿の人柄を称え、投降者の殺戮については、アイルランド人、スペイン人、イタリア人等は正当な敵ではなく、戦争の国際法の適用を受けない反逆者にすぎない、と述べている。この強引な論理によれば、相手が戦闘員であってもなくても、反逆者と見なすことによって殺すことが可能となり、国際法が回避できる、というわけである。

スペンサーの『管見』の出版は1633年まで行われなかった。1633年はストラフォード (Thomas Wentworth, Earl of Strafford, 1593-1641) がアイルランド総督としてダブリンに着任した年であり、『管見』は、アイルランドの歴史を記した他の二つの文書とともに合本の形で着任間もないストラフォードに献

2 アイリニアスがスペンサーの分身であることから、この発言はスペンサーがグレイ卿に同行してメキシコの大量虐殺を目撃したことの傍証と考えられている。

じられている³。この1633年の『管見』をミルトンは1642年から44年ごろに読んだことがパーカー他による『備忘録』(*Commonplace Book*)の分析から判明しており、『見解』に影響を与えたことは疑いを入れない⁴。

ミルトンは、備忘録の「政治的狡猾さ」(*Astutia politica*)と題する文章の中で「アイルランドにおける国王代理や総督たちの悪しき政策」と書き込んでおり、これはスペンサーが歴代のアイルランド総督の政策の一貫性の欠如と腐敗を非難しているくだりを読んだことのメモであろう、とメイリーは見なしている(102)。また、「軍隊の訓練について」(*De disciplina militari*)と題する項目の中では、はっきり『管見』のページを挙げながら「戦後の兵士への糧食を考えておくこと。スペンサーのアイルランド対談 84 ページ等」と書きこんでいるのである。スペンサーは、九年戦争(Nine Years War, 1594-1603)の中にあつて、戦後も安定的にイングランドが支配を続けるためには、戦後も兵を引き上げず、駐屯軍(garrison)としてアイルランド各地に兵を残すこと、そして兵士の糧食をイングランドから輸送しなくてもよいように、アイルランドに農業を推進することを提案していた。ミルトンが1642年から44年にかけて、すなわち、1641年の蜂起の直後にこれらの点に注目していたということは、共和国政府の外国語秘書官に任命されて『見解』を書く何年も前から、彼がアイルランド支配に関心を抱いていたことを示している。

3 この書物は、*Two Histories of Ireland* というタイトルにもかかわらず、三つの文書の合本(composite)である。(1) メインであるカトリック聖職者で歴史家カンピオン(Thomas Campion)のアイルランド史、(2) プロテスタント神学者ハンマー(Meredith Hanmer)によるアイルランド年代記、これらに加えて、(3) スペンサーの『管見』を収録したものである。

4 Parker and Shawcross 46, Maley 193-96. 興味深いことに、ミルトンはスペンサーの『管見』に触れているほか、合本中のカトリックのカンピオンによる歴史の記述に言及しているが、プロテスタントのハンマーによる部分への言及はない。

国王への忠誠の誓い（The Oath of Allegiance）さえすればよい、ということになったのである。忠誠の誓いは、国内のカトリック教徒がローマ教皇に仕えるのを阻止するためのものであったのだが、この誓いからさえも、「ローマ教皇に仕えない」、という宣誓の文言が注意深く外されていた⁵。

公文書であるこれらの条項は翌 1646 年ダブリンとロンドンで王室公認のもと出版された。さらに 1649 年 1 月 17 日、当初の条項を増補・改訂する形で 34 項目からなる新たな和平協定が結ばれる（図 2）。この第二和平協定の 13 日後に国王チャールズは処刑されるが、チャールズが国家を体現して署名した協定は共和国政府にとって不都合なものであっても理論的には有効なままであった（現実には、カトリックの権利がまったく守られなかったことはその後の歴史が示しているのだが）。共和国政府は、不都合なテキストであるこの協定文書が一人歩きするのを何としても阻止することが必要となった。それが外国語秘書官ミルトンに、反論としての『見解』を執筆させた意味であったと考えられる。ミルトンは執筆に数ヶ月をかけ、5 月に出版されたものは 65 ページに及ぶ冊子になった。最初の 45 ページは和平協定に加えて、3 月にオーモンドがダブリン市長のジョーンズ大佐（Colonel Michael Jones）に宛てて、国王側に翻るよう説得する書簡、その 5 日後にジョーンズがオーモンドに宛ててそれを拒否した書簡、ベルファストのスコットランド人長老派による議会派批判を載せ、続く 20 ページでミルトンがそれらに対する見解を述べる、という形になっている。

『見解』の中での和平条項に関するミルトンの姿

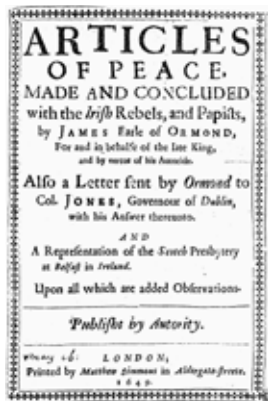


図 2 1649 年版 和平協定文書
 版權は共和政体を示す Authority、発行所は一般の印刷所である。

5 1642 年にブリテン臣民のために発行された、誓いの文言 *England's Oaths. Taken by all men of Quality in the Church and Common-wealth of England* を見よ。

勢について、研究者の評価は分かれている。コーンズ (Thomas Corns) やメイリー (Willy Maley) がミルトンを植民地主義者の側に近づけて捉えているのに対し、レイモンド (Joad Raymond) は、ミルトンが当時の扇情的な描写から距離を置き、和平協定における反逆者への譲歩とチャールズ一世のイングランド人被害者への同情のなさを非難するに留まっている、と論じている。確かに、ミルトンの公人としての発言は同じ事件を扱った当時の他の出版物と比較すれば穏当なものと言うことができるであろう。むしろ重要なことは、それが政府の公文書として出版されているながら、ミルトンの「私」が入り込んだものになっていることである。

『見解』におけるミルトンの主力は20ページのうち10ページを費やして長老派への反駁に置かれている。そこに繰り返し現れる、国王処刑の正当化、これこそができたばかりの共和国政府のもっとも重要な主張であったと思われる。和平協定については34ある条項のうち、7条項にしか触れず、1641年の事件そのものに関するコメントと合わせても4ページ半しか費やしていない。1641年から既に8年が過ぎ、また王の処刑、共和制の樹立といった大事件の陰になって、アイルランド人によるイングランド人大量殺戮は、時事性を失っているように思われるかもしれない。しかし、この事件は、他の大量殺戮の事件と決定的に異なり、共和国政府の方針で、被害者からの大規模な聞き取り調査の記録が保存され、また詳細な描写が出版されたことにより、他の事件に比べて長くイングランド人の意識に留まり、現在性を保ったと考えられる。被害者からの聞き取り調査記録は1641年の12月に始まり、1640年代、さらに50年代まで延べ約8000件が記録され、「宣誓証書」(Depositions) と呼ばれる文書となって31巻19000ページに達した⁶。また、事件直後に出版された多くのパン

6 これらは18世紀の中期(1741)にダブリンのトリニティ・コレッジ(Trinity College)に寄付され、現在に至っている。過去に何度か活字化して出版しようという試みがあったが、その内容の惨たらしさから、そしてアイルランド内の政治的

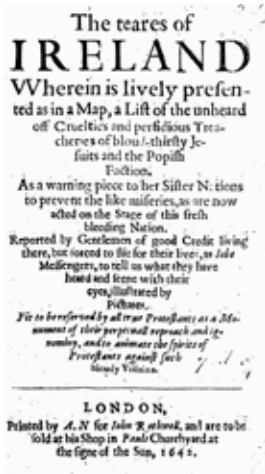


図3



図4

クランフォード (James Cranford) の『アイルランドの涙』(*The Teares of Ireland*) (1642) の表紙と p. 75。全編にわたり、残虐行為の様子が絵と言葉で「生き生きと」(lively) 表現されている。

フレットや書物が、さまざまな方法による殺人、強姦、といったアイルランド人の残虐行為を時には絵入りで詳細に語り、また死者の数を誇張した(図3、4)。これらは当然、議会派にとって、アイルランド人の野蛮性を証明する恰好の材料となり、クロムウェルによるアイルランド征服の根拠ともなった。『見解』を書くにあたりミルトンはそういった書物の影響を免れていない。

たとえば、死者数について、ミルトンはある箇所では何千人何万人 (many thousand)、別の箇所では 20 万人以上、としている。

↘ 対立から出版が差し止められてきた。しかし、ついに 2007 年から 2010 年にかけてのプロジェクトにより、誰でも全てのオリジナルマニュスクリプトと活字化したものをウェブ上で見るできるようになった。1641 *Depositions* (<http://1641.tcd.ie/index.php>)

…何千人何万人ものイングランド人に対する無慈悲で野蛮な大量殺戮（イングランド人は、アイルランドに対する権利と資格を大変な優しさと穏当さを持って行使してきたし、この事件がなければアイルランド人の背信行為などいともたやすく退けて安住できたはずなのに）（46）

彼（チャールズ1世）の臣民の20万人以上の血、一度たりとも彼を傷つけたことも、服従しなかったこともなかった臣民がこれらのアイルランドの野蛮人どもに殺戮され、切り刻まれ…（49）

レイモンドによれば、20万という数字は、メイ（Thomas May）の『イングランド議会史』（*The History of the Parliament of England*, 1647）から取られたものである（326）⁷。しかし、この数字には明らかに誇張がある。カレン（L. M. Cullen）によれば、17世紀初頭のアイルランドの人口は全体で約140万人と推定され、そのうちのプロテスタントのイングランド人で殺害された人が20万人もあるとは考えがたいからである⁸。

また、「権利と資格を大変な優しさと穏当さを持って行使してきた」という一文に示されるように、ミルトンはアイルランドに対する従来イングランド人の支配にまったく問題がなかったかのように書いている。しかし、たびたびの叛乱とその鎮圧の歴史を少しでも知っていればそれが虚偽であることはミルトン自身も分かったいたであろう。少なくともスペンサーの『管見』は、1580年のイングランド人によるアイルランド人虐殺に言及しているのであるから、

7 May 10. レイモンドによれば、メイはさらにこの数字を判事テンブル（Sir John Temple, 1600-77）のセンセーショナルな『アイルランド人叛乱』（*Irish Rebellion*, 1646）に負っているという。テンブルは、1641年から43年の停戦までの被害者数を300,000と試算している（10）。虐殺された被害者の数、その後議会軍が到着して戦闘が続いた中でのイングランド人、アイルランド人の戦死者数、民間人の被害者数、全ての死者数など、何の死者数なのか情報が錯綜し、実際の被害者数は確定が困難である。

8 マーシャル（John Marshal）は2000から12,000の間と試算している（58）。

『管見』を読んでいたミルトンがそれを知らないはずはない。ここでミルトンは、個人の立場を離れて、オフィシャルな言説に徹している、ということができよう。実際、全体を通じた一人称主語は共和政体を示す“we”であって“I”ではない。

しかし、全体でただ一箇所、ミルトンは一人称単数の“I”を用いている。オーモンドが書簡で議会は無神論者を擁護している、と書いていることに反駁して、次のように述べるところである。

我々は無害な世俗の問題について市民への保護は拒めない。市民の良心は、我々の関わるどころではなく、しかるべき指導者の手に任せて、市民のために祈るだけである。しかしながら、もし我々の中に、無神論者、神とキリストの悪意ある敵が見出されるなら、議会はそのような者を大目に見る（tolerate）ことはなく、あらゆる適切な努力をもって彼らを抑圧する（suppress）ことを宣言する、と私は考える（I think）。

世俗、良心、信仰の三つの分野に対し、議会が市民に対しいかなる義務を負うのか、を考えると、ミルトンは思わず、「私」に戻っているようである。そこで肯定的に用いられる動詞が、議会権力が「抑圧する」（suppress）であることは、公のミルトン自身と、私のミルトン自身とが、プロテスタント・イデオロギーにおいて交差していることを示すように思われる。

そうであるならば、次のようにミルトンがクロムウェルを称賛するのは、公の秘書官としてであろうか。それとも個人的な称賛であろうか。ミルトンはオーモンドがクロムウェルを名指しで攻撃していることに反論して、むしろ感情的にクロムウェルをほめちぎる：

その武勇と高い人徳は、彼「オーモンド」などよりずっと高貴な多くの敵さえもが称賛し恐れていて、その評判と名声を肯定し、その働きから、共和国は十分に満足を得ている。クロムウェルに成り代わって、このように答えよう、ほんの数年の内

に輝かしく目覚しい功績を挙げて、彼の家系に欠けていた貴族らしさの礎をなし、子々孫々に永遠の名声を残すのだ。その功績の輝かしさは、オーモンドがその先祖と束になって、彼らの栄光の最も広範な場面であるアイルランドでの彼らの手柄を並べてもかないっこないものである (52)。

この『見解』中でのミルトンのクロムウェル称賛と、前節で引用した『管見』におけるスペンサーのグレイ称賛との間にはパラレルな関係を見出すことができる。スペンサーがグレイ卿の虐殺行為を正当化したように、ミルトンの言葉はクロムウェルのアイルランド征服を事前に正当化するものとなっているのである。

Ⅲ クロムウェルのアイルランド征服

『見解』が1649年5月に出版されて3ヵ月後の8月、クロムウェルは新軍 (New Model Army) の先頭に立ってダブリンに上陸した。処刑されたチャールズ一世の遺児が王党派とアイルランドのカトリックによってチャールズ二世として擁立されようとしていたのを見たクロムウェルは、ことを一気に片付ける作戦に出る。ダブリン郊外のラズミンズ (Rathmines) で約5,000の死者を出す戦闘を皮切りに、ドロヘダ (Drogheda) で約3,500、その後東海岸から南海岸にかけてのウェクスフォード (Wexford)、ウォーターフォード (Waterford)、キルケニーから南部マンスター (Munster)、北へ転じてアルスターなど、翌1650年5月まで彼の征服は続くのである。クロムウェルは過酷な戦術について、「敵を早く意気阻喪させ、さらなる犠牲者が出るのを未然に防ぐこと」と述べている⁹。クロムウェルがイングランドに戻った後も議会軍は残り、対ゲリラ戦を続けた。最後の都市ゴールウェイが陥落し1652年には和

9 ケアリ (John Carey) はタイムズ紙上でこの発言はアメリカによる原爆投下に加えられた正当化と同じだ、と述べている (17 Aug. 2008)。

解協定 (Act for the Settlement of Ireland) が叛乱への加担者を処刑し、カトリック・アイルランド人の大半を西部ゴールウェイに強制移住させ、その土地をプロテスタント・イングランド人に与えることで、1641 年からの一連の叛乱は幕を下ろす。

結局、1641-52 年間にイングランド人、アイルランド人の双方に出た死者の数は、クロムウェルと共和政体の経済担当学者であったペティ (William Petty) の推計によれば 618,000 (人口の 40%)、うちカトリックは 400,000 とされている。現代ではこの数字も誇張があると考えられているが、それでも人口の 20% は関連死者だという。また、アメリカを中心として海外植民地へ奴隷として売られたものが約 50,000 に上ったという。

このようにスペンサーとミルトンの政治文書は、絡み合いながら初期近代のイングランドとアイルランドの関係の中のもっとも血なまぐさい部分と絡み合うものとなっている。それらを通して我々は二人の詩人の不都合な面に直面させられる。スペンサーは詩においては理想的な牧歌世界を歌いながら、他方アイルランドに関しては「野蛮な」生業たる牧畜を「文明的な」農業に転換させることを提案した。そして若いミルトンは牧歌「リシダス」(“Lycidas” 1637) において、聖ペテロに腐敗したカトリックの聖職者を叱責させた。

しかも恐ろしい狼がその秘密の前足で
 日々がつがつと貪るものに加えて、誰も文句も言えず…
 だが、門に立つ両手使いの剣が
 一度だけ、それも一度で終わる打撃を与えようと構えている
 (“Lycidas” 128-31)

作品内では聖書的隠喩以上のものではなかった剣の一撃は、のちに不吉な現実味を帯びるのである。聖ペテロの声に重なるミルトンの「私」の声が、『見解』において「公」の声の中に再現されていくのである。

本稿では、長老派教会との関連でスコットランドと結び付けて考えられることの多いミルトンの政治文書中でアイルランドがどのようにとらえられているのかを考察し、その「公」人としてのミルトンの言葉の中に、「私」が入り込んでいることを見てきた。16世紀から17世紀の英文学作品の総体において、これまで認識されてきたよりも多くの作家や作品に、イングランド人によるアイルランド征服の何らかの影を認めることができるのではないだろうか。風呂敷を広げるなら、それはこの時代に形を現してきたブリテン、ブリティッシュ・エンパイアという概念を考慮に入れた英文学研究への入り口ではあるまいか。

参考文献

- 1641 *Depositions* Trinity College Library Dublin. (<http://1641.tcd.ie/index.php>)
- Articles of Peace, Made and Concluded with the Irish rebels, and Papists, by James Earle of Ormond, also a Letter sent by Ormond to Col. Jones, . . . with his Answer thereunto. And A representation of the scotch Presbytery at Belfast in Ireland. Upon all which are added Observations. Publisht by Authority.* London, 1649. EEBO
- Calendar of State Papers Relating to Ireland of the Reign of Elizabeth. Volume 2: 1574–1585.* Ed. Hans Claude Hamilton. 1867. Rpt. Searchable Text Edition. TannerRitchie Pub., 2006.
- Carey, John. Review of Micheal O Siochru's *God's Executioner: Oliver Cromwell and the Conquest of Ireland*. Sunday Times. 17 August 2008.
- Clarke, Aidan. *Ireland: 1641: Contexts and Reactions*. Eds. Micheál Ó Siochrú, et al. Manchester UP, 2013.
- Corns, Thomas. "Milton's Observations Upon the Articles of Peace: Ireland under English Eyes." *Politics, Poetics, and Hermeneutics in Milton's Prose*. Ed. David Loewenstein et al. Cambridge UP, 1990. 123–34.
- Cranford, James. *The Teares of Ireland wherein is lively presented as in a map a list of the unheard off cruelties and perfidious treacheries of blood-thirsty Jesuits and the popish faction*. London, 1642. EEBO
- Cullen, L.M. "Population Trends in Seventeenth-Century Ireland." *Economic and Social Review*. 1975; 6. 2. 149–65.

- Edwards, David, et al. eds. *Age of Atrocity: Violence and Political Conflict in Early Modern Ireland*. Four Courts Pr., 2007.
- England's Oaths. *Taken by all men of Quality in the Church and Common-wealth of England. The Oath of Supremacie. The Oath of Allegiance. And The late Protestation. Published by G.F. for satisfaction of his Parishioners*. London, 1642. EEBO
- Hughes, Merritt Y. "Introduction Part Three: *Articles of Peace*." *Complete Prose Works of John Milton*. Vol. III. 1648–1649. Yale UP, 1962.
- . "The Historical Setting of Milton's *Observations on the Articles of Peace*, 1649." *PMLA*. 1949; 64.5. 1049–73.
- The Last Articles of Peace made, Concluded, Accorded and Agreed upon the 30. Day of Iuly, 1646. By and between His Excellency, James Lord Marques of Ormond...to treat and conclude a Peace with His Majesties Roman Catholique Subjects...*. Published by Authority and command of the Lord Lieutenant and Council there. 1646. EEBO
- Maley, Willy. "How Milton and some contemporaries read Spenser's *View*." *Representing Ireland: Literature and the Origins of Conflict, 1534–1660*. Eds. Brendan Bradshaw, et al. CUP, 1993. 191–208.
- Marshall, John. *John Locke, Toleration and Early Enlightenment Culture*. CUP, 2006.
- May, Thomas. *History of the Parliament of England*. Oxford, 1647. EEBO
- Milton, John. *The Complete Works of John Milton*. Vol. VI: *Vernacular Regicide and Republican Writings*. Eds. N. H. Keeble et al. OUP, 2013.
- Parker, William Riley and John T. Shawcross. "Milton's *Commonplace Book*: An Index and Notes." *Milton Newsletter*. 1969; 3.3. 41–54.
- Petty, William. *The History of the Survey of Ireland, Commonly Called the Down Survey, by Doctor William Petty, A.D. 1655–6*. Ed. Thomas Aiskew Larcom. The Irish Archaeological Society, 1851.
- Raymond, Joad. "Complications of Interest: Milton, Scotland, Ireland, and National Identity in 1649." *The Review of English Studies*, New Series. 2004; 55. 220. 315–45.
- Spenser, Edmund. *A View of the State of Ireland*. Ed. Andrew Hadfield et al. Blackwell, 1997.
- Temple, John. *Irish Rebellion; or an History of the Beginning and First Progresse of the Generall Rebellion Raised within the Kingdom of Ireland upon the . . . 23 Oct. 1641. Together with the Barbarous Cruelties and Bloody Massacres which Ensued Thereupon*. London, 1646. EEBO
- 小野功生『ミルトンと十七世紀イギリスの言説圏』彩流社, 2009.